田原史起著

『草の根の中国――村落ガバナンスと資源循環――』

東京大学出版会　2019年　v + 280 + xxページ

松里公孝（まつざと きみたか）

本書は2020年度アジア・太平洋賞（大賞），地域研究コンソーシアム賞（研究作品賞）を受賞しており，いくつか書評も出たようだ(注1)。著者の田原史起と私は，本書中でも言及される新学術領域「ユーラシア地域大国の比較」（2009 − 2012年）を推進するなかで，ロシアのタンボフ州ズナメンカ郡の製糖工場の寮と，タタルスタンのヴォルガ河畔のチンキ村の漁民の家に一緒に住みこんだ。『アジア経済』が私に書評を依頼したということは，旧ソ連・ユーラシアと比較する視点から田原の農村ガバナンス研究を論ぜよとの意向だと思うのでそれに従いたい(注2)。

田原は，一橋大学と東京大学の駒場を往復しながら天津の南開大学にも留学し，新中国初期の農村統治体制の形成を扱った博士論文で1998年に社会学博士号を取得した(注3)。この頃から存命者にインタビューするオーラルヒストリーの手法を駆使していたようだが，今世紀に入ってから中国各地に位置するいくつかの村の定期訪問と定点観察を始めた。現政権下で現地調査が難しくなったことを福に転じて，十数年間の研究をまとめたのが本書である。

田原は，本書が示す通りの研究者である。村に入った初日はインタビューをするわけでもなく，まず村中をぶらぶら，しかし隈なく歩いて簡易地図を描く。村リーダーや村民との関係も，調査主体と調査対象である以前に，まず人・対・人である。アジア・太平洋賞の受賞スピーチでも「自分は気が小さいので，相手の関心がない話をずけずけ切り出す勇気がない」と皮肉交じりに自分の研究姿勢を誇った。おかしな外在的イデオロギーを調査に持ち込まないのはプロの研究者なら当然としても，業績主義の圧力をいなしながら結論を急がぬ観察をするのは，誰にでもできることではない。

一般に村社会の基本的課題は，村の集団的生存を図ることである。そのために，補助金や開発プロジェクトなどの上位政府からの資源の投入を求める（公），民間企業からサービスや資材を購入する（私），村共同体や血縁親族が自力で問題解決する（共）という三方法が組み合わされる。戦後日本の農村では，自民党の長期にわたる恩顧政治と高度成長のなかで「公」と「私」が強くなった。社会主義型の都市化・工業化が完遂された後に資本主義経済に移行したロシア農村では，基軸をなす「公」を「共」が補完していたところに，弱い「私」が接合された（ただし，民営化された集団農場の行政代行を「私」と考えれば，ロシア農村の「私」は弱くない）。同じ社会主義でも，21世紀の初めまで農業から工業への資源移転と農村の自力更生が追求された中国農村では「共」が突出した。2005 ～ 2006年頃，政府の政策が農民保護に転じた後，「公」と「私」が強まりつつある。この転換は，中国農村にどのようなインパクトを与えたかが本書の研究課題である。

血縁か地縁か

ロシアの農村においては村共同体の地縁的結合が大きな役割を果たしてきたのに対し，中国の農村では姓を同じくする大家族の結合が基軸で，村の地縁的結合が生まれたのは社会主義時代，とくに人民公社期であったと田原は述べる。人民公社は血縁的結合であった自然村を「生産隊」として自らに組み込み，さらにその上位に「生産大隊」，つまり行政村を置いて自然村をまとめさせたのである。ロシアにおいては，元々は強かった村の地縁共同体を農業集団化が破壊したが，中国においては社会主義が地縁的な村を創造したのである（234ページ）。中国の村の平均規模は，2006年時点で自然村が約60世帯，行政村が約330世帯であった（65ページ）。

ソ連においても，農村のライフラインを担ったのは貧しい村ソヴェトではなく実態的には集団農場であったが，中国の人民公社は公的にも行政を兼務した。ソ連における集団農場の行政代行とは，教育・医療などの従事者への住宅供給，ガス・水道管など

ⓒ IDE-JETRO 2021
https://doi.org/10.24765/ajiakeizai.62.3_95

のインフラ維持，学校など公共施設の補修，保育園・学校給食への食材の供給，除雪，住民葬儀の際の自動車の提供など多岐にわたる。ちなみに，ソ連においては郡市や大都市における基幹企業も活発に行政代行を行っており，これは農村の特殊事情ではなかった。

人民公社の解体後，大家族の結合が再び前面に出てきた南部の村（田原の事例では江西省の花村と貴州省の石村）と，人民公社の遺産である村の公式組織や村リーダーが重要な役割を果たし続けている北部の村（同じく山東省の果村と甘粛省の麦村）とが分化した（198 ページ）。南部稲作地帯における人民公社の最大の功績は，農民の労働動員で水利灌漑施設を作ったことであったため，人民公社解体後，これら施設が維持できなくなったことによる喪失感が大きかった。逆説的にも，大規模な水利灌漑施設が必要でも建設可能でもなかった北部では，人民公社解体の喪失感も小さかったと田原は指摘する（186 ページ）。なお，山間にある甘粛省麦村では，人民公社時代に労働動員で棚田を造成したものの，細分化された耕地では農業機械化の可能性も限られていた（162 ～ 163 ページ）。

このように本書の問題設定は「人民公社時代に行政村とその共有財産が創出された。公社の解体後，それら共有財産を維持代替するために，それぞれの村がいかに工夫を凝らしているか」というもので，人民公社を高く評価しているようにもみえる。これは，中国研究者にしばしば違和感を抱かせるようである[注4]。ソ連研究者の場合，農業集団化が数百万人の餓死者を出したことから，集団農場に対する評価は一層辛いであろう。私の考えでは，ここでのポイントは集団化の執行方法や集団農場の効率性如何ではなく，国家や共同体を維持するための賦課を住民の直接労働で遂行させるのは，消防団や雪解け後の地域清掃にみられるように現代の先進国にも残存する歴史上普遍的な方法・leitourgia だということである。これらを税化（金納化）すれば実際に住民の負担軽減になるのか，「直接労働も嫌だ，増税も嫌だ」というのなら，どうやって水利施設等を維持するのかという問題は，客観的に考察しなければならない。ロシアでも，農村部で軽犯罪に対処する自警団組織は，社会主義崩壊後にいったん廃れたが，2003 年の改正連邦地方自治法で復活した。

農業技術面での人民公社の最大の貢献が水利灌漑施設の建設であったとすれば，ソ連の集団農場のそれは，大型機械農業を普及させたことであった。大型機械農業が普及していなかった中国において人民公社が技術的・物理的にも解体されて農地が均分されたのに対し，ソ連継承国においては，集団農場の技術的・物理的解体は，機械化農業を止めて「石器時代に戻る」ことを意味していた。そのため，集団農場は所有面では国有や協同組合所有から会社・資本主義的大規模農場に改造されたが，経営単位としては維持された（多くの場合，企業の淘汰合併によって，より大きくなった）。かつてのコルホーズ員は，大規模農場の株主のような存在になり，配当を現金，農産物，牧草などで受け取るようになった。大規模農場による行政代行も続いた。人民公社が廃止された中国農村で，その役割をどう代替するかで，本書が示すように村ごとの多様性が生まれたのに対し，大規模農場とその行政代行が継続した旧ソ連では，だいたい一様な村ガバナンスをこんにちも観察することができる。

旧ソ連で大規模農場が維持されたのは必要に迫られてのことであって，市場経済をめぐる論争とはあまり関係がない[注5]。社会主義やソ連が大嫌いだったはずのリトアニアでも大規模農場は維持された（むしろ農業企業経営層は，リトアニアのオリガークの社会的供給源でさえある）。ソ連継承国のうち，中国のように集団農業を物理的に解体したのは，管見ではアルメニアとクルグズスタン（キルギス）しかない。その結果，両国では農業生産力が著しく低下したのみならず，農業従事者が一律に「ファーマー」になってしまったため，農村に大学教育を受けた専門家（機械技師，畜産専門家など）にふさわしい仕事がなくなった。アルメニアやカラバフの農村では，エレヴァン工科大学のような一流大学の卒業者が普通のファーマーをやっているのでびっくりする。もちろんこれらは年配の人々で，新卒ならそもそも農村に戻って来ないだろう。中国では若者が都市の大学に進学することは片道切符なのに，旧ソ連圏ではどうして大卒者が農村に帰って来るのかということが，本書にも通底する田原の問題関心だが，旧ソ連でも大規模農場を解体すれば同じ問題を抱えることになる。なおアルメニアとクルグズスタンはいずれも山岳国として有名なので，「甘粛では機械

化農業が普及しなかった」という田原の観察と共通性があるのかもしれないが，私の観察では両国でも集団農場が発達していたのは平野（盆地）部なので，その解体は第一義的には政権の見識（不見識）によると考えられる。

行政村と自然村

一般に，行政村と自然村がどのような関係にあるかは，農村ガバナンスのあり方を強く規定する。田原によれば，華北では１つまたは２つの自然村から行政村が形成され，村の人口規模は小さくなる傾向がある。南方諸省では，行政村は多数の自然村から形成され，人口規模も大きい。本書の４事例のなかでは，貴州石村と江西花村が後者に該当する（いずれも 14 自然村から構成され，花村は約 600 世帯，石村は約 800 世帯）。これらに対し，山東果村は１自然村から形成される割には人口規模が大きく（約 600 世帯），甘粛麦村は構成自然村数，人口共に２類型の中間（5 自然村，約 400 世帯）に位置している（42 ～ 43 ページ）。

田原の観察によれば，自然村と行政村が一致しているか，そうでなくとも人口が中心村落に集中していれば，公式の行政機構や村指導者を通じて問題解決しようとする志向が強くなり，行政村が多くの自然村から構成されていれば，自然村間の利害調整が難しくなり，また自然村が個別に問題解決する傾向が強くなるため，血縁や非公式ネットワークの役割が大きくなる。前者の例として山東果村の水利施設建設，後者の例として江西花村の生活道路整備，甘粛麦村の宗教施設建設があげられている。

行政村を構成する自然村数と当該行政村の総人口の相関関係については，帝政期の欧露は中国とかなり異なった。当時，土地が瘦せ（非黒土帯），可耕地が分散した北部では，比較的広い行政村のなかに多数の小さな自然村が分散していた。肥沃な黒土帯・ステップである南部（今日のウクライナを含む）では，自然村１村あたりの人口が多く，少数の自然村から構成されるにもかかわらず行政村の人口規模も大きかった。中国北部と同様，欧露南部では行政村が自然村１村から構成される場合すらあったが，そのことは行政村人口の少なさを意味していなかった。以上の事情を反映してか，ロシア語では「村」をあらわす単語はスィエロ（教会のある中心村）とデレヴニャ（礼拝所しかない衛星村）の２つあるが，ウクライナ語ではセロしかない。

ロシアの郷および行政村は，1861 年の農奴解放の際にそれまで農奴主や国有地・御料地（皇室地）管理機構が果たしていた行政・徴税機能を農民自治に担わせるために導入されたもので，中心村落と衛星村落の間の自然な結びつきを必ずしも反映していなかった。ロシア革命後に生まれた村ソヴェトは，農奴制の残滓を一掃して，村間の自然な結びつきを考慮したもので，その面積は，帝政期の行政村よりもやや大きくなった。

ロシアの自然村共同体（村団）のトレードマークのように誤解されている土地の割り替えは，実際には，土地の収益性が低い中央黒土帯（北部）に特徴的な慣行だった。旧ポーランド領のベラルーシや右岸ウクライナには割り替えの伝統はそもそもなかったし，土地の収益性が高い黒土帯（南部）では施肥や灌漑も行われ，家族の人数とその家族が共同体から受け取った分与地面積の間の（次第に拡大する）ずれを利用して借地農業に精を出す有力農民も多かったため，割り替えに対して強い抵抗があった。

本書が指摘する中国南部農村の物質主義と北部農村の精神性のコントラストは，帝政期の欧露にも見事にあてはまる。北部出身でナロードニキ運動に挫折したある知識人が，農民の実態を知るためにヴォロネジ県（南部ステップ）の郷書記を短期間務めたのだが，次のように感想を述べた。「広漠たる，肥沃な土地に住む人間（中略）は，北部の農民と異なり，粗野で心を欠き詩的なひらめきがなく，美しいものを解さない。また歌を，民謡を，ヴィリーナ（口承叙事詩）を持たない。（中略）北部の人間は，自分の世界観，意見を持ち，詩を解し，自然の秘密に思いをはせ，世界の誕生を思い，また信仰を抱く。（中略）この辺の者はルーブリのためにルーブリによって生きているだけである」［島田 1986，87］。

フルシチョフ時代には，都市的な生活様式を農村に人工的に導入することが試みられ，集団農場や行政村の合併が追求されると同時に，衛星村落から中心村落への移住が奨励された。これにより住民が分散居住することを特徴としていた北部農村と，１村集住の南部農村の違いがなくなり，いずれにおいても中心村落が圧倒的なウェイトをもつようになった。

田原の図式に従えば，中心村落への人口集中は「公」により農村の福祉水準を高める戦略に有利である。ロシアの農村では，衛星村落には年金生活者の家を数戸残すのみといった事態がままみられる。この場合，郡行政府は，しばしばそうした村落にガス管を引かず，村落を安楽死させる政策をとる。

村リーダー

後期ソ連とロシアでは，政府が「公」の資源投入で農村の社会発展を図った。中国においては，政府が農民保護政策に転じて以降も，依然として「共」が基本で，その分，村の自立性も高い。村政府の役割もこれに対応している。中国では，村政府は自立した経済政策を展開し，ときには多国籍企業の誘致活動まで行う。ロシアでは，村ソヴェトの役割は，老人，母子家庭，学童，若者政策，出産奨励など，社会福祉が主である。村の農工業の管理指導は郡行政府（社会主義時代は共産党の郡委員会）の仕事である。社会主義時代には集団農場は行政村単位で組織されていたので，経済活動の単位と経済指導の単位の間にずれがあったし，あり続けているのである。

村の幹部人選も村政府の役割に対応している。ロシアの村長は，教員や医療従事者など社会的領域の職業の出身者が多く，女性が明らかに多数である。これは，社会主義を経験した国では指導職に女性が占める比率が高いという一般的傾向だけではなく，住民の面倒をみるのが主任務の村政府には女性の方が向いているという性差認識にも基づいていると思う。その証拠に，郡以上のレベルの幹部の圧倒的多数は男性である。郡で頭角を現した若手幹部は州に抜擢され，将来的には全国指導者になるのも夢ではないのに，村のリーダーは，一生，村の名望家として終わる。この事情は中国の村幹部も同じだが，中国の村幹部が上に上がれないのは学歴が低く，村の外の世界をあまり知らないからであろう。ロシアの村長はほとんどが元専門職，つまり大卒である。

ロシアの村長と村を散歩すると「この家には3人子供がいるのでこれこれのケアが必要」といった形で，村長が各戸の状況と必要を詳細に把握しているのに驚かされる。そしてこの村長たちのほとんどは，与党・統一ロシア党の党員なのである。自分の面倒をみてくれる村の名望家から統一ロシア党への投票を頼まれれば，内心では野党・共産党に共感している高齢者でも，まず逆らえない。

まさにここにおいて，私は本書への違和感を抱く。本書には共産党の村書記は登場するが，それは村のリーダーがたまたま村書記になっただけのように描かれる。共産党の村支部は本書に全く登場しない。しかし，たとえば江西花村では，人口3217人中56人が共産党員だとされる（108ページ）。人民代表には具体的な仕事がない（238～239ページ。つまりソ連における代議員への命令委任のような仕組みはない）というのはその通りかもしれないが，では村の共産党員は何をしているのか。彼らをどう説得して奮起・入党させたのか。ヘゲモニー国家の支配党が，村の社会経済発展について村支部の会議で議論せず，政策ももたないなどということがありうるだろうか。これは，中国映画『正義の行方』（1994年，原題は『被告山杠爺』）に描かれた村支部の在り方とは著しく異なる。映画に描かれたのはファンタジーなのか。村ガバメントという用語を拒否し，村ガバナンスに関心を集中する田原が，逆の方向でみるべきものに目を閉ざしているのではないかと，私は危惧するのである[注6]。

田原は，中国において郷鎮以上の競争選挙が行われておらず，人脈以外に草の根と上位政治をつなぐリンクがないことをもって「中国の草の根政治は非政治的だ」という認識の根拠とする。しかし，統一ロシア党の票動員マシーンは，競争選挙が始まってから生まれたものではなく，一党制時代に形成された恩顧ネットワークを利用したものである。かつては競争選挙がなかったからこそ，体制の正統化のために異常に高い投票率を実現しなければならなかった。それなりの社会福祉を「公」から市民に提供することで，たとえ選択肢はなくても投票所に足を運んでもらうという互酬性は，ソ連時代に成立していた。現在の中国では事情が異なるとすれば，どう異なるのか。

村の公共宗教

本書は，貴州石村について民族識別を，甘粛麦村については家神廟建設を扱う。村の文化資源は，田原が比較的最近，関心を向け始めた問題と察するが，今後の展開を大いに期待させる。

石村の住民は，明代に現在の湖南省から軍務で移住させられた喇叭（らっぱ）人と称される集団で，これが漢族と苗族のいずれに属するのか民族識別上の議論となっていた。1981 年，1950 年代から続く民族識別工作の最終段階に，まさに駆け込みで喇叭人が苗族に属することが認められた。村は違うが同じ郷出身の州指導者の尽力の結果であった。貧しく，教育以外に社会的上昇の機会をもたない地域の児童にとって，大学入試の際に下駄をはかせてもらえる非漢族への帰属認定は，かけがえのない資源である。とはいうものの，喇叭人は言語文化的に漢族にほぼ同化されてしまっているので，残された数少ない苗族的要素として「山歌」（即興的な七言律詩に節をつけて歌う）の再興が図られている（152 ～ 155 ページ）。

甘粛麦村における寺廟や家神廟建設については，そもそも中国の民間宗教が，多くの場合儒教，仏教，道教が習合したもので，教義などない「ご利益宗教」であることは本書が説明する通りである。世界宗教を観察し慣れた目には，あのようなものは習俗であって，とても宗教にはみえない。しかし同時に，麦村が属する隴南市が，甘粛ムスリムの拠点である蘭州や臨夏に程近いことが私には気になる。両地域の間には定西市を挟むのみであるが，定西市もまた家神崇拝を隴南市と共有する地域らしいのである（177 ページ）。

スーフィズム（カディリー教団）の拠点である臨夏では聖者（シェイフ）崇拝が盛んで，聖者の遺骸を記念するものが巨大な拱北から路傍の小さな墓碑まで無数にある。これほどの聖者崇拝は，同じくスーフィズムの拠点であるロシアのダゲスタンにもない。西北漢族と回族・東郷族の間で宗教文化的な相互影響はないであろうか。2009 年，かつてサウジアラビアでイスラームを学んだ臨夏のサラフィー・モスクのイマムにインタビューした際，「スーフィズムを排撃してはならない。なぜならそれは中国文化に深い根をもっているからだ」と言っていたのが印象に残った。ダゲスタンのサラフィー主義者がスーフィのシェイフに対し，しばしば暗殺も含む攻撃を仕掛けるのとは対照的な寛容さである。

まとめ

本書評では，旧ソ連圏・ユーラシアとの比較の観点から有意と思われる点につき論評したが，とにかく面白い本で，読みだしたら止まらない。文献からの引用は叙述の正確さを期するためで，基本的な情報は，すべて自分の足と目と耳（と舌）で収集したものである。「埋葬ガバナンス」など，やや概念過剰，用語過剰な印象を受けるが，それも調査結果を一回的な事例紹介にとどめるのではなく，比較研究に貢献したいという情熱の表れであろう。中国研究者のみならず，世界のさまざまな地域の農村とコミュニティ政治を研究する者にとって，必読の書といえよう。

（注 1）本書の内容は山本［2020］で詳しく紹介されている。

（注 2）本書中では，田原の過去十年余の重要テーマである，ロシア・インド・日本との農村ガバナンス比較はむしろ抑え気味である。著者の知識の濃淡がある国の間の比較は別稿に譲ったと考えられる。次を参照されたい。Tahara［2013］，Matsuzato and Tahara［2014］，田原［2019］。

（注 3）田原の博士論文は，田原［2004］として出版された。

（注 4）たとえば山本［2020，133］を見よ。

（注 5）集団農場をファーマーに分割する農業改革がうまくいかなかった事情について，山村［1997］のとくに第 5 章を参照。

（注 6）田原の用語法では，ガバメントは上位政府からの資源の投入による統治で，都市の国有セクターで働いていた市民がその典型的享受者である。ガバナンスはコミュニティの自力救済である（49 ページ）。田原との私的な会話では，こんにちの中国農村で共産党に入党するとすれば，党員になることでビジネスチャンスを掴むという動機しかないのではということであった。

文献リスト

〈日本語文献〉

島田孝夫 1986.「知識人書記の見た村の農地割り替え——アーストゥイレフの回想より——」和田春樹編『ロシア史の新しい世界——書物と史料の読み方——』山川出版社.

田原史起 2004.『中国農村の権力構造——建国初期のエリート再編——』お茶の水書房.

——— 2019.「都市＝農村間の人的還流——中露比較の試み——」『ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）』(23): 65-91.

山村理人 1997.『ロシアの土地改革——1989 ～ 1996 年——』多賀出版.

山本真 2020.「中国農村における社会結合について——田原史起著『草の根の中国——村落ガバナンスと資源循環——』から考える——」『アジア研究』66(3).

〈英語文献〉

Matsuzato, Kimitaka and Tahara Fumiki 2014. “Russia’s Local Reform of 2003 from a Historical Perspective: A Comparison with China.” *Acta Slavica Iaponica* (34): 115-139.

Tahara, Fumiki 2013. “Principal, Agent or Bystander? Governance and Leadership in Chinese and Russian Villages.” *Europe-Asia Studies* 65(1): 75-101.

（東京大学大学院法学政治学研究科教授）